

患者を 生きる

3274

僕の状態、そんな悪いの？

永六輔さんの長女でエッセイストの千絵さん(58)のもとに、父親から珍しく電話がきたのは2010年11月17日の夜だった。

「僕、今、どこにいると思う？ 実はね、救急車に乗ってるの」

千絵さんは驚いて、「どうしたの？」と問いかけた。

永さんは東京都内でタクシー乗車中に衝突事故に遭い、警察官に「大丈夫」と伝えられたものの、救急車を呼ばれたという。弾んだ声で話す永さんは、初めて救急車に乗るのを楽しんでるようだった。

搬送先の病院で頭部などの検査を受けたが異常はなく、その日のうちに帰宅できた。当時、パーソナリティーを務めていたラジオ番組でもこの経験を話題にした。

「事故に遭ってから、パーキンソン病の症状がよくなったって言われるんです」

患っていた自身の病氣と絡めて、笑いを誘った。

永さんは08年ごろから、足のすくみや字の書きづらさ、箸の持ちにくさを感じるようになっていた。それつが回らなくなり、リスナーから「声が聴きづらい」というはがきが届いた。

事故の1カ月ほど前、荏原病院(東京都大田区)神経内

転倒し骨折・入院 家の中の移動も難しく

我が家で

永六輔の大往生①

科を受診し、横地正之医師(76)現在が国際医療福祉大学三田病院にパーキンソン病と診断された。薬を飲み始めると、言葉がなめらかになり、字もふつうに書けるようになった。歩く時に、体が前のめりになって



長女の千絵さん(右)と次女の麻理さん(左)とともに。晩年は親子で過ごす時間が増えた=2014年、家族提供

えい・ろくすけ 本名・永孝雄。1933年、東京・浅草生まれ。早稲田大学中退。中学生の頃からラジオ番組に投稿を始め、大学時代から放送に携わる。「見上げてごらん夜の星を」「遠くへ行きたい」などの作詞を手がけ、著書「大往生」は発行部数が245万部に達した。2010年、パーキンソン病と診断された。ラジオ番組「永六輔の誰か」と「こかでは通算で49年続いた。



ラジオ番組に出演する永六輔さん=2008年、中井征勝氏撮影

妻の最期支えた看護師 自宅に再び

んには赤ちゃん」の作詞で知られ、1994年には自らの死生観を記した「大往生」(岩波新書)がベストセラーになるなど、多方面で活躍した永さんは83歳だった昨年7月、自宅で亡くなった。

ラジオ番組の中で、前立腺がんやホルモン療法を受けていることや、パーキンソン病であることを公表した。永さんは「大往生」の中で、自身に宛てた「弔辞」として、こう記している。

「旅暮らしの中で、一番好きな旅はと聞かれ、「我家への帰り道」と答えた永さんです」

千絵さんは、病氣になってからも、父はできるだけ家で過ごしたいと思うだろうと考えていた。

永さんが再び救急車に乗ることになったのは、事故から約1年後の11年11月。自宅を転び、足の付け根にある「大腿骨頸部」を骨折した。高齢者の骨折で最も多い場所、寝たきりの原因にもなりやすい。運ばれた病院に入院することになった。

入院中、「せん妄」が出た。認知機能に異常がないのに、意識がもうろうとして、意味が通らないことを口にする症状だ。高齢者が入院した時などにしばしばみられる。足の骨が折れているのに「はいっ、帰ります！」と突然言いだし、ベッドから立ち上がるうとした。用もないのに、ナースコールを繰り返したこともあった。

約2カ月後に退院すると、仕事で外出する際は、車椅子を使うようになった。千絵さんは、ひとり暮らしをする永さんに朝食を食べさせるため、毎朝、実家へ通い始めた。食事は、妹でフリーアナウンサーの麻理さん(55)が作り置きしておいてくれた。

午前8時すぎに千絵さんが実家に着くと、永さんはリビングでテレビを眺めていることが多かった。「おはよう」と声をかけると、永さんは「大丈夫だから、来なくてもいいよ」と娘を気遣った。千絵さんが食卓に朝食を並べながら「薬を飲むんだから、ちゃんと食べて」と頼む

と、しぶしぶ席についた。14年には背骨の圧迫骨折もわかり、次第に家の中の移動にも家具につかまらないと、難しくなった。

その年の夏、千絵さんは家族のほかに、父の面倒を見てくれる人を探そうと考えた。ただ、見ず知らずの人を家に入れるのはためらわれた。

「永六輔は、家ではこんなによぼのおじいさんなのか」と驚かれるだろうな」と想像すると、踏み切れなかった。

浮かんだのは、02年に永さんの妻の昌子さん(当時68)をがんでみとった際、訪問看護してもらった鈴木紀子さん(65)だった。鈴木さんがあいさつに訪れると、永さんは不安そうにこう尋ねた。「僕ってもう、そんなに悪い状態なの？」鈴木さんの登場は、妻の時と同じように、最期が近いのかと感じたようだった。

◆5回連載します。(宮島祐美)

ご意見・ご体験お寄せください

連載「患者を生きる」は、今週から新シリーズ「我が家で」を始めます。病氣や障害で医療・介護が必要な場合でも、住み慣れた地域で、その人らしく暮らすために必要なことは何かを考えます。医師が近くにいない離島での医療や、がんの在宅療養、医療的なケアが日常的に必要な子どもの生活などを取り上げる予定です。記事へのご意見や体験をお寄せください。あて先は〒104・8011 朝日新聞東京本社 科学医療部「患者を生きる」係。ファクスは03・3542・3217、メールはiryo-k@asahi.comへ。「読者編」などで紹介させていただきます。氏名と連絡先の記入をお願いします。